

出会い系は明るい

分かち合うことで死なない

成功と幸福の違いは分かち合う相手がいるかどうか、と誰かが言った。何か目標を達成し、その達成・成功の嬉しさを誰かと分かち合うことができたときに幸せが生まれるという。分かち合う、これこそが冷凍都市を生きるために最も重要なことじゃないかと思う。この「冷凍都市でも死なない」も、うまく生き抜く方法を誰かと共有しようとしている。分かち合っ得られる幸せは、きっと赤の他人よりも友人や恋人、家族など身近な存在と分かち合ったときの方が大きい。それらの相手が十分にいる人はそもそもこの世が冷凍都市だという概念がないと思う。分かち合う相手が少ない、もしくはいない人たちに向けて。そんなときこそ出会い系サイトがあるじゃない、と伝えたい。



出会い系サイトには卒業がない

私には同じ学生時代を過ごした友人、いわゆる学友が残っていない。「残っていない」というのは「その当時はいた」ということ。でも高校を卒業すれば、大学を卒業すれば、みんないなくなってしまう。卒業という明確な別れまでの期間限定の友人のようだった。みんなにとっては私がいなくなったんだろうけど。けれど私には友人と呼べる人が多い（と思っている）。数多の出会い系サイトで知り合った人たちばかりだ。パンツ見せ師から元バンドマンの男性まで。私は今年で25歳になるけど、20歳の頃からそのようなサイトで様々な人と出会い続けていた。

出会い系サイトを介して生まれた交友は友情かと疑問を抱く人もたくさんいると思う。ただこれは結果論だけど、私にとっては、いなくなった人たちといなくならなかった人たちなら、いなくならなかった人たちを真だと思うしかない。

どこか満たされない人同士なら

実際のお会いよりも出会い系サイトを介してのお会いを探していたのは、出会い系サイトの持つ性質のためか「どこか満たされない」という感覚を持った人が多かったから。なにか漠然とした本当を待ち続けている人がたくさんいた。そのような人たちに「なにかわからないけど、なんかこの人は本当だと思う」と思わせることができれば出会えてしまう仕組みになっていた。私は顔が良いわけではなく、性格にも難がある。それでもそう思わせれば出会えてしまった。なんとなく信頼してもらえさえすればいい。不安定な世界だから、なんとなくでも十分すぎるくらいだった。



発泡スチロールくらいがちょうどいい

そうしてなんとなく信頼してもらい、なんとなくの信頼を保証し続けた結果、私の周りには友人も恋人もいた。何も完璧な信頼も重厚な愛も必要ない。そこには発泡スチロールみたいな愛だけがある。発泡スチロールくらいの硬さで傷つけてみたり、発泡スチロールくらいのやわらかさで守ってみたり、発泡スチロールくらいの軽さで嫌ってみたり、発泡スチロールくらいの重さで愛してみたり。それくらいがちょうどよかった。



おわりに

そのような友人と毎日を共に暮らし続けているわけではない。ただ2014年の冬はあの子と過ごしたな、2016年の夏にはあんな人がいたな、と言ったようにひとつの季節を共に過ごしたことは事実だ。そしてそこには明確な別れがなかったから、今でもふと思い出したようにその当時の延長線上にある日々を、いつでも再開することができる。

出会い系サイトでの出会い方やどういう人たちと出会ったのかは詳しくは言わない。それは冷凍都市で生きにくい人たちが各々のやり方で各々の相手を見つけて欲しいから。正解も間違いもない少し不安定な世界で、なんとなく信用した相手と思い出したように会い、漠然としたなにかを満たし、それとなく求めていたものを分かち合う。それだけでどこか冷凍都市でも生きていけるような、明るい気持ちになる。